

玩具の汽缶車

竹久夢二

青空文庫

お庭の木の葉が、赤や堇すみれにそまつたかとおもっていたら、一枚散り二枚落ちていって、お庭の木はみんな、裸はだか体になつた子供のようになり、寒そうに手をひろげて、つつたつていました。

つづれさせさせ　　はやさむなるに

あの歌も、もう聞かれなくなりました。北の山の方から吹いてくる風が、子供部屋の小さい窓ガラスを、かたかたいわせたり、畑の唐もろこしの枯葉を、ざわざわゆすつたり、実だけが真まっくろ黒くなつて竹垣によりかかつて立っている日輪ひまわり草をびっくりさせて、垣根の竹の頭で、ぴゅうぴゅうと、笛をならしたりしました。

「もう冬が来るぞい」

花子のおばあさんはそう言つて、真綿のはいった袖なしを膝ひざのうえにかさねて、背中をまるくしました。

「おばあさん、冬はどこからくるの？」花子がたずねました。

「冬は北の方の山から来るわね。雁がんがさきぶれをして黒い車にのつて来るといの」

「そうお。おばあさん、冬はなぜさむいの？」

「冬は北風にのつて、銀の針をなげて通るからの」

「そうお。おばあさんは冬がお好き？」

「さればの、好きでもないし嫌いでもないわの。ただ寒いのにへいこうでの」

「そうお」

花子は、南の方の海に近い町に住んでいましたから、冬になると北の方の山国から、炭や薪まきをとりよせて、火鉢に火をいれたり、ストーブをたかねばならぬことを知っていました。おばあさんのために冬の用意をせねばならぬと、花子は考えました。そこで花子は薪と炭のそこへあてて手紙を書きました。

ことしもまた冬がちかくなりました。おばあさんが寒がります。どうぞはやく来て下さいね。

花子

北山薪炭様

北山薪炭きたやましんたんは、花子の手紙を受取りました。

「そうだそうだ。もう冬だな、羽黒山に雪がおりたからな。花子さんのところへそろそろ行かざるまい」

北山薪炭はそう言つて、山の炭焼小屋の中で、背のびをしました。

「どれ、ちよつくらいつて、汽缶車の都合をきいて来ようか」

北山薪炭は、停車場へ出かけました。そこにはすばらしく大きな汽缶車がかくもくと黒い煙をはいているのを見かけました。

「汽缶車さん、ひとつおいらをのつけて、花子さんの町までいってくれないか」

北山薪炭が、そう言いました。

「いけねえ、いけねえ。今日はおめえ、知事さまをのつけて東京さへゆくだよ。そんな汚ねえ炭なんかのつけたら罰があたるよ」

汽缶車は、そう言つて、けいきよくぶつぶつと出ていってしまいました。

すると、そこに中くらいの^{おおき}の大きな汽缶車が一ついました。北山薪炭はそばへよつていつて、

「ごんちは、君ひとつ花子さんの町までいって貰^{もら}えないかね。花子さんはおいらを毎日待つていらつしやるんだ」

と言いますと、いままで昼寝をしていた汽缶車は眼^めをさまして、大儀そうに言うのでした。

「どうせ、遊んでいるんだからいつてやってもいいが、なにかい、連中は大勢かい」

「そうさね、炭が三十俵に、薪まきが百束だ」

「そいつあいけねえ。そんな重いものを引つ張つていったら、脚も手も折れてしまわあ、せつかくだがお断りするよ」

「そんなことを言わないでいつておくれよ。花子さんが待つてるから」

「うるせえな、昼寝をしている方がよっぽど楽だからな」

そう言つて、ぐうぐう眠つてしまいました。

そのとき、北山きたやましんたん薪炭の前へ、ちいさいちいさい、玩具おもちゃの汽缶車が出て来ました。

「薪炭さん、さつきからお話をきいていると、お気の毒ですね。ぼくがひとつやってみましょうか」

そう呼びかけられて、見ると、とても小さい汽缶車です。

「実際困っているんだが、君いつてくれますか。だけど見かけたところ、君はずいぶんちいさいね。これだけのものをひっぱつてゆけるかね」

「ぼくもわからないが、なあに一生懸命やつて見るよ」

「じゃあ、ひとつやつて貰もらおうか。おれたちもせいぜい軽くのっかるからね」

玩具の汽缶車は、三十俵の炭と、百束の薪とを引つ張つて、停車場を出発しました。停車場の近所の平地ひらちを走るときは楽だったが、国境の山へかかると路みちは急になって、玩具の汽缶車は汗をだらだらながして、うんうん言っています。

「なんださか、こんなさか、なんださか、こんなさか」

元気の好よいかけごえばかりで、汽缶車はなかなか進めないのです。玩具の汽缶車は、もう一生懸命です。どうかしてはやく花子さんのところへ薪炭をおくりたいという一心です。

「なんださか、こんなさか」

「汽缶車さん、気の毒だね、おもたくて」

「なあに、もすこしですよ。なんださか、こんなさか」

それでもやつとこさ、峠のうえまで、ちいさな汽缶車が大きな薪炭を引きあげました。

「やれ、やれ、骨がおれましたね」

「これからはらくですよ、下くだりざか坂ですからね」

こんどはもうまるでらくらくと走ってゆきました。そしてすぐに花子さんの所へつきましました。

「さあ、花子さん来ましたよ」

「はやく来られたわね」

そこで、花子さんも、おばあさんも、冬用の用意が出来ました。

青空文庫情報

底本：「童話集 春」小学館文庫、小学館

2004（平成16）年8月1日初版第1刷発行

底本の親本：「童話 春」研究社

1926（大正15）年12月

入力：noir

校正：noriko saito

2006年7月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

玩具の汽缶車

竹久夢二

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>